

知求会ニュース

2003年10月

第7号

◎ 2003年度修了おめでとう！

2期生の川本紀美子(国際社会研究専攻)さんが、9月30日付で国際学修士の学位を授与されました。無事修了され、本当におめでとうございます。国際人権にかかわる分野において、これからのご活躍を祈念します。

◎ 2003年度国際交流基金賞・受賞おめでとうございます！

非常勤講師である石澤良昭先生(上智大学教授)が、カンボジアのアンコール遺跡群など東南アジアの文化財調査・保存に尽力してきた功績により、2003年度国際交流基金賞を受賞されました。心からお祝い申し上げます。

◎ 着任教官紹介その3

10月1日付で専任講師として、アンドリュー・ニール・ライマン先生が着任されます。大学院の授業では比較現代文化論を担当され、英語で授業を進めるそうです。先生はカナダ生まれで、オーストラリアの大学をご卒業されました。先生の若さと国際的な経験が活かされ、国際学研究科において知的進化に貢献されることを祈念します。

◎ 退官報告

外国人教師の李恩民先生は、8月31日付で宇都宮大学国際学部を退官されました。先生には、大学院開設時からご指導いただきました。多くの同窓生がお世話になったことと思います。9月からは、私立の桜美林大学国際学部で助教授としてご勤務されます。今後の研究とご活躍を祈念します。

◎ 平成15年度修士論文中間発表会開催

休学者のための中間発表会が、10月15日(水)に開催されます。発表者は、国際文化研究専攻の小池研究室所属・田邊知成さんで、テーマは、「日本語の自他について」です。発表会の時間と場所は、以下の通りです。13時から14時まで 国際学部E棟4階 演習室6にて。なお、日本語や日本語教育に関心のある方は、ぜひお出かけ下さい。

◎ 大学院国際学研究科入学試験実施

9月24日(水)に秋の入学試験が実施されました。入学志願者は、国際社会研究専攻16名、国際文化研究専攻12名の合計28名です。

◎ 国際学部だより

外交官第1号誕生(国際学部)

マレーシアからの留学生 リナ ハンス ビンチ ロズリ さん(2003年3月卒業、国際社会学科)は、マレーシア政府外交官試験に合格され、今後の活躍が期待されます。

◎ 在外研究動向報告

中村真助教授(国際文化研究専攻担当)

先生は、8月21日から来年の6月20日まで、米国コネチカット州にあるコネチカット大学コミュニケーション・サイエンス学部の Ross BUCK 教授の元で「感情のコミュニケーションについて」の研究のために渡航されました。研究の新動向報告や研究成果が期待されます。

中戸祐夫講師(国際社会研究専攻担当)

先生は、昨年の8月20日から8月19日まで、米国・ワシントン DC にあるアメリカン大学 James MITTELMAN 教授の元で「ポスト冷戦期における日米通商摩擦の政治経済学」の研究をされて一時帰国されました。夏休み中に、学生の集中講義を終えて、更なる研究のために、9月21日から来年の3月19日まで、韓国にある延世大学で韓国国際交流財団による「韓国語研修フェローシッププログラム」に参加し、韓国語能力の向上を図ると共に朝鮮半島をめぐる国際関係に関する研究のために渡航されました。大いなる研究成果が期待されます。

松金公正助教授(国際文化研究専攻担当)

先生は、10月5日から再来年の2月4日まで、財団法人交流協会が行った外部有識者の公募の平和友好交流計画プロジェクト「台湾における台湾史研究に関する調査・研究」に採用されたため、台湾(台北)にある財団法人交流協会台北事務所日台交流センターを拠点としての研究のために渡航されます。なお、先生は9月1日付で助教授に昇任されました。

◎ APSIA(国際問題学院連合)加盟承認

国際学研究科・国際学部が **APSIA(国際問題学院連合)** に準メンバーとして加盟しました。APSIA の概要は以下の通りです。設立は、1985年「国際問題大学院を有する米国のいくつかの大学によって設立された国際的な非営利学術組織」です。目的は、国際理解、繁栄、平和、安全保障など国際問題の解決に関するプロフェッショナルな教育の提供と改善です。加盟大学・機関は、45大学・機関です。

ホームページは、次の通りです。 <http://www.apsia.org>

◎ 過去関連記事紹介その1

宇都宮大学広報誌(U.U.now)に、知求会ニュースで紹介した関連記事(PDF)がありますので、以下にご紹介します。興味のある方は、次のホームページにアクセスして下さい。

(<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/index.html>)

第29号(2003.1) ◎トピックス 国際学研究科国際シンポジウム開催

～アメリカン大学国際関係学部長グットマン博士を迎えて～

フォーラム 第4号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。台風が去ってからいよいよ本格的な秋の季節を迎えようとしています。(原稿集めに苦勞しています。)今回、第7号に寄稿をお願いしたのは、現役である文化の小池研究室・田邊さんです。

◎ 2期生近況報告

ハルピンでの2年間を終えて

田邊知成

この7月までの2年間、僕は大学院を休学し、国際交流基金の派遣で中国へ行っていました。この9月より大学院に復学します。

僕はかれこれ12年ほど日本語教師をしているのですが、今回の派遣は中国のハルピンにある黒龍江省教育學院というところで、主に省内の中等教育機関で教えている現地の日本語教員に助言指導をおこなうというものでした。中国に派遣されるのは青年海外協力隊として桂林に派遣されて以来2度目になります。

山水画のような景観でおなじみの桂林は北回帰線のわずかに北に位置し、1年の半分が夏のようなところでしたが、今回のハルピンは半年が冬のようなところでした。ちなみに桂林が属する広西チワン族自治区はベトナムと国境を接しており、海南島を除いた中国大陸部の最南端、ハルピンのある黒龍江省はロシアと国境を接しており、中国の最北端の省ということで、はからずも2回の派遣で中国の南北端での生活を体験できたわけです。

ハルピンはとにかく寒い。ということぐらい赴任する前から重々承知の上だったわけですが、実際に一冬越してみると本当に寒い。近年は温暖化の影響か、僕が滞在した2年間も -30°C を下回ることはなかったと思うのですが、寒いときで -28°C ぐらいまでは下がったのでしょうか。よく聞かされていた「鼻毛が凍る」という実感こそなかったものの、息をするたびに鼻の中がツンとしたのは事実です。顔が痛くて我慢できないという体験を初めてしました。僕は関西の出身で、今までの生活の最北端は宇都宮です。 -5°C まで下がる宇都宮の冬に適応するのに苦労したものです。ハルピンに着任するまでは -20°C という数字が想像できず、 -5°C も -20°C も同じようなものだと思っていたのに、最初の一冬で両者の間には 15°C の差があるということに気づきました。真冬に -28°C ぐらいが続くとき、たまに -23°C ぐらいに上がると、やはり 5°C ぐらい暖かいような感じを覚えるものです。

では、ハルピンに着任して意外だと思ったこと（あるいはやっぱりと思ったことでしょうか）を少々記しておきます。

通常「日本語教育」というのはどのような町でおこなわれるものかという点、やはり北京や上海、大連など、大都市が中心です。学習者の動機は様々ですが、普通は「外国」というものを意識しにくい農村部より都市部のほうが盛んなものです。しかし、僕の職場では違いました。どうやら日本語は「農村の言語」であるらしい。その理由は僕の職場が中等教育を管轄している部門であったためです。

中国の中等教育における外国語というのは、日本と同様1外国語です。日本語を選択している学生は、英語やその他の外国語を学習せず、大学も日本語で受験します。特に日本語と近い文法構造を持つ朝鮮語を母語とする少数民族（具体的に言えば朝鮮族ですが）にとっては、母語に近い日本語の学習は大学受験に有利にはたらきました。しかし、近年中国の大学でも、市場経済への移行、そしてそれに伴うWTO加盟、コンピューターの普及、

北京オリンピック開催決定などの流れの中で、英語を重視する傾向が日増しに強まっていて、大学の受験科目から日本語を外すところが増えてきました。その結果、多くの中等学校で日本語が廃止または縮小されたのです。この中国の英語熱にはなかなか凄まじいものがある、北京市内のタクシー運転手などは強制的に英語研修を受けさせられているようです。本屋へ行くと「タクシードライバーズ・イングリッシュ」とか「商店イングリッシュ」といった会話本がたくさん並べられています。

この日本語実施校の減少は、中国の人口の 9 割を占める漢族の学校はもとより、今まで「日本語学習は受験で有利」とされていた少数民族の民族教育でも同様の傾向が現れています。ただ、朝鮮族の民族中学・高校では英語をマスターした民族教師を確保することがことのほか難しく、大学卒の英語教師を確保できる都市部の学校だけが英語に切り替え、農村部の学校では英語教師が確保できないという消極的な理由で日本語教育が継続されているのです。

僕は黒龍江省の教育学院というところに配属されたのですが、「学院」といっても実際は教育委員会のようなところで「学生」はいません。加えて、上記のような理由でハルピンではあまり仕事がないので、通常ハルピンでは出勤してもお茶をすすって新聞読むだけの「中国公務員の事務出勤」です。そんなわけで、僕の活動も農村が中心になります。出張にはよく出かけました。それも農村ばかりです。おかげで元来中国農村旅行が大好きだった僕にはなかなかいい体験ができました。

一番印象に残っているのは渤海国の首都であった寧安という町の小学校を訪ねた時のことです。現在中国では、小学校からの早期外国語教育を奨励しているのですが、やはり英語教師を確保できない朝鮮族の村の一部では日本語を開講しています。寧安自体小さな町なのですが、それでも市の中心にある朝鮮族小学校では英語が開講されています。日本語をやっているのはそこからまたバスで何時間も行く本当の山村です。4つの村の小学校で日本語をやっているのですが、僕はそれぞれ1週間ずつ、1ヶ月にわたって滞在し、担当教員にマンツーマンで助言指導をおこないました。

どこの村にもホテルはおろか食堂すらありません。たいていは村内の農民宅に泊めてもらいました。オンドル式の朝鮮農民の住居です。日が暮れると酒を飲み、酔いが回ると布団が敷かれ家族ともども川の字になって眠るという毎日です。どの村でもイノシシやイヌを絞めてごちそうしてくれました。まるで文化人類学者のような生活でしたが、旅行者には決してできない経験ができ、とてもおもしろかったです。通常は都会的な仕事である日本教師としては二度と体験できない「シゴト」でしょうね。

現在、中国の朝鮮族の村は過疎化が激しく、どの小学校も「少子化」で廃校寸前という感じでした。ある小学校では毎年学童を募集することができず、何学年かが欠けていました。合併する、合併した、昔はこの村にも中学校があった、といった話をあちこちで耳にしました。過疎化の理由はやはり若者の都市への流出です。朝鮮・韓国の国連同時加盟以来、多くの韓国企業が中国に進出していますが、朝鮮語と中国語のバイリンガルである朝

鮮族が大都市へ行けば、仕事はわりと容易に見つけることができます。また、村に家族を残しての出稼ぎも多いです。その多くは韓国を目指します。僕は韓国の制度には明るくないのですが、日本政府が南米の日系人に対しておこなっているような同胞に対する優遇策があるのかもしれませんが。もしそのような優遇策がなくとも、韓国語に不自由しない朝鮮族が経済格差のある韓国で働きたいと願うのは当然の流れでしょう。

これは「村」だけの問題ではなく、中国東北の朝鮮族社会ではごく当たり前の傾向で、都市部でも農村部でも、朝鮮族学校の生徒を調べれば半数以上の生徒が両親のうちどちらか、あるいは両方を欠いているというのが実情です。また、一度出稼ぎに出ればなかなか戻ってこないのが一般的で、韓国でパートナーを見つけて永住を望む者、はたまた中国国内で浮気を重ねる者も多く、かなり多くの家庭が崩壊の危機に瀕しているようで、社会問題化しています。ブラジルの日系人社会もきっとこのような感じなのだろうなと思いました。逆に相当数の脱北者がこの地域に潜伏（農村部ではかなり公然と）しています。

出稼ぎ組の家庭に行くと、とにかく家電製品が充実していて、特に衛星テレビチューナーが普及しています。僕は今述べてきた「村」以外に、長期出張の度にいろいろな朝鮮族家庭にホームステイさせてもらいましたが、たいていホストファミリーには「欠格家族」が選ばれます。出稼ぎがない家庭には都合よく空き部屋などあるはずがないからです。そのような家庭ではほとんど中国のテレビを見ることはありません。毎日 KBS（韓国のNHK）を見て生活しています。ですから例の SARS の件も、彼らはかなり早い時期に「深刻な問題である」ことを感じ取っていました。

というわけでこの 2 年間、実はハルピン市内では毎日ほとんど仕事せずというのが実態で、何もみなさんに報告できるような活動はできなかつたのですが、それなりに貴重な体験もして帰ってきました。とりわけ中国にしながら朝鮮民族の生活を垣間見られたことは有意義であったと思います。行く前に朝鮮語を少しやっておけばよかつたと後悔しました。結局仕事の相手が日本語教師であったため、2年間ろくに朝鮮語も、中国語さえも上達せずに帰ってきましたが、今では何とかハンダが少しながら読めるようになりました。実際の仕事の内容については何も記すことができませんでしたが、日本語教育に興味のある方にはまた個別にお話したいと思います。長々と書き連ねてきましたが、この辺で筆を休めたいと思います。

（国際学研究科 国際文化研究専攻 第2期在学学生）

編集後記：限られた時間でのニュース発行、同窓生の皆さんのご感想はいかがでしたか？ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。 **同窓会会員の皆様へのお願い：**
住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 global@minakuru.net
